宮下加奈のいるところ

さつまいも

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
宮下加奈のいるところ

【Ｎコード】
Ｎ２９４１Ｉ

【作者名】
さつまいも

【あらすじ】
宮下加奈が見ている日常。そこにはひとつのお話が。

第1話

「はぁ…」

「どうしたの加奈？　ため息なんかついて。またあの男の子のことでも考えてたの？」

「あ…しずるちゃん、おはよう」

頬杖をついて窓の外を眺めていると、登校してきたばかりのしずるちゃんが声をかけてきた。

「そのことなんだけど…やっぱり、今日告白しようかと思って…」

「なるほどね。それで、どういうふうに告白したらしたらいいのか考えてたのね」

ふ～ん…とかいいつつニヤリと笑ってわたしをからかうしずるちゃん。…さっきからおもってたけど、なんだろう…考えてる事が見透かされているような…

「そうなんだけど…何かいい告白の仕方ってないかなぁ…？」

「そんなの校舎裏にでも呼び出して『あなたのことが好き好き大好き～！　死ぬほど大好き～！　いっそ殺して～！』とか言っておけば　…その眼は何？」

「い、いやぁ…普段のクールなしずるちゃんとのギャップが激しくて…」

才色兼備なしずるちゃんは、たまに奇天烈なことを言う。そのたびにわたしは普段のしずるちゃんとのギャップに萌…じゃなくて！　驚かされる。

「あと、それ言うの恥ずかしいから他のでお願いっ！」

両手を合わせ、片目を閉じながら上目遣いでしずるちゃんにお願いする。

「いいじゃない。何を言おうと恥ずかしいことに変わりないんだから」

笑顔でわたしに言ういずるちゃん。…若干楽しんでるように見えるのは気のせい？

「限度があるよ～！」

口を尖らせて抗議をしたけど、「言いなさいよ」と満面の笑みで勧めてくるしずるちゃん。…そんなかわいい顔で言われてもダメなんだからっ！

その後も、「やだよぉ～」「言いなさいよ～」というやりとりが延々と繰り返されていたけど、先生が来たところでようやく終わった。授業に入ると、今日はいくつかの教科で小テストがあって、四苦八苦十六苦ぐらいした。隣の席では、しずるちゃんがクラスの誰よりも早く解き終わって、今日出されたばかりの宿題に手をつけていた。しずるちゃんってすごいなぁと改めて思った。そんな調子

で、ほぼ毎授業しずるちゃんをみていたわたしは、小テストを半分も解かないうちに時間切れ。といっても、半分も解けないのはいつものことだけど。くすん。

放課後、

「授業中、私のこと見てたでしょう？」

と、しずるちゃんが微笑しながら聞いてきて、ドキッとした。しずるちゃんの微笑にわたしの胸がた…かなったということではない。どうやらわたしが見ていたことに気づいていたみたいだ。…そりゃあ、あれだけガン見してたら気づかない方がおかしいよねー…。

「うん…見てたよ？」

「そう…わかったわ。あなたの思い、ちゃんと受けとめてあげるから…」

そう言って、両手を広げて何かを受け入れるかのような態勢をとるしずるちゃん。

「へ？　しずるちゃん、何言ってるの？」

突然の意味不明なしずるちゃんの発言と行動に戸惑うわたし。

「何って、加奈は私のことが好きなのでしょう？　好きな男の子がいるなんて嘘までついて、私に近づこうとするなんて…」

「ええ～っ！？　な、何を言い出すのしずるちゃん！　わ、わたしに好きな男の子がいるのは本当のことだよっ！？　そ、それに、今日見てたのは、しずるちゃんってやっぱりすごいなぁって思って見てただけで、別に好きとかそういうんじゃな――――」

「あはははっ！」

突然おなかを抱えて笑いだしたしずるちゃん。さらに混乱するわたし。

「な、何！？」

「はは…ごめんごめん、必死になってる加奈がかわいくてつい」

「もうっ！　しずるちゃん！」

しずるちゃんにめいいっぱいからかわれた後、二人でグラウンドに向かった。グラウンドではすでに何人かのサッカー部員がユニフォームに着替えてウォーミングアップをしていた。

「あ…！」

その中で、今まさにストレッチをしている最中のある男の子に目がいく。

「ふふふ…お目当ての人は見つかったみたいね」

「うん！　…でも、どうしよう…呼び出すなんてとてもじゃないけ

どできないよう…」

「とてもじゃないならできるわよ。さあほらっ！　いってきなさいっ！」

「ちょ、ちょっと！　お、おさないでよしずるちゃんっ！　や、やっぱりできないよ～！」

まるで石にでもなったかのように動かないわたしの体。

「もう…しょうがないわね。私が呼んできてあげるから」

動かないわたしにしずるちゃんはそっと微笑み、サッカー部の人たちのいるところ歩いていった。わたしは、動かない体を無理やり動かして、グラウンドの隅の方まで行き、そこでしずるちゃんを待つことにした。しずるちゃんがサッカー部の人たちのいるところまで行くと、部員のほぼ全員の視線がしずるちゃんの方に向いた。男子の間でかなり人気のあるしずるちゃん。男の子たちの視線が集まるのは当然のことかもしれないけど、はたから見るとなんかすごい…。今まで何人に告白されたのかな？　今つき合ってる人はいないとは言っていたけど。

そうこうしているうちに、しずるちゃんがわたしのところまで男の子を一人連れてきた。

「お待たせ。ほらっ、ここまでしてあげたんだから、あとはちゃんと自分で言いなさいよ？　じゃあ私は門のところで待ってるから」

「えっ！？　いっしょにいてくれないの！？」

「私がいたら邪魔になるでしょう？　それじゃあまたね」

微笑みながらそう言って、しずるちゃんはそそくさと行ってしまった。

「それで、僕に用って何？」

男の子がせかしてくる。そ、そうだよね。早く伝えて用件すませてあげないと。練習あるもんね。だ、だ、大丈夫！　ちゃ、ちゃんと言える！　待っててしずるちゃん！

「あ、あ、あ、あ、あのっ！　わ、わ、わたしっ！　そ、そ、そそのっ！　あ、あ、あ、彰（あきら）くんのこ、こ、こ、ことがっ！　が、ががす、す、す好き、好きですっ！　つ、つき合ってくださいっ！」

言って頭を思いっきり下げる。なんとか言いきった…体中が火照って熱い。どんな答えでも、きちんと受けとめる覚悟はしている。しばらく…といってもほんの少しの間がたってから、彰くんは答えを告げた。

「…ごめん」

彰くんは小さめにそう言った。顔を上げると、彰くんは悲しい顔をして斜め下を見ていた。

「…それじゃあ、僕…練習あるから…行くね…」

言って彰くんはグラウンドに戻って行った。

その後、どうやってその場から離れたのか覚えていない。気づいたときには、もうあと少しで門に着くところだった。しずるちゃんがわたしに気づいて駆けよってきた。そして、しずるちゃんはわたしをやさしく抱きしめた。わたしは、しずるちゃんの腕の中で、泣いた。

「よしよし…」

しずるちゃんに頭をなでられた。ふられた悲しみと、しずるちゃんの暖かさにわたしの思いは溢れて涙が止まらなかった。

ひとしきり泣いた後、しずるちゃんといっしょに下校した。

夜、寝ようととしても、目が冴えて寝れなかった。明日学校に行くのが憂鬱だ。でも、今はまだしずるちゃんが励ましてくれるからがんばれる気がした。今回はだめだったけど、次は成功させたいなと思ったところでわたしはやっと眠りについた。

第1話（後書き）

言葉遊びは苦手なので、分かりやすい文章をこころがけました。

物足りない感じなのはおれの力量不足です。

もし、このお話（シリーズも含めて）が完結したところで、続編とか書いてみて、という要望があれば書く…んじゃないかな？

まあそんな感じです。

第2話

翌朝。昨日寝るのが遅くなったせいか、いつもより遅く家を出た。

「おーいっ！　宮下（みやした）ー！」

登校中に声をかけられた。立ち止まって、声のした方を振り向くと、男の子が軽く手を振っていた。わたしの側まで駆けてくる。

「おはよう、雅人（まさと）くん」

「おう」

走ってきた割に息切れをしていない雅人くん。あいさつを交わしてからいっしょに歩き出す。

「あのさ、おれ…宮下に聞きたい事があるんだけど」

「え？　わたしに？」

聞きたい事って、いったい何だろう？

「昨日さ、宮下グラウンドにいただろ？　帰宅部なのに」

「えっ？」

ま、まさかみられてた！？　で、でも、人目につかないところでしたはずだし…。

「なんか用事でもあったのか？」

…よ、よかったぁ…見られてなかったみたい。でも、なんて答えよう？　とりあえず、用事があったのは事実だし…適当にごまかしておこう。

「ちょっとね」

「どんな用事？」

「えっ？　そ、それは…」

どうしたんだろう？　いつもの雅人くんとなんか違う感じがする…。返事に困っていると、前をしずるちゃんが歩いているのを見つけた。

「あ！　し、しずるちゃん！」

呼びかけると、しずるちゃんは振り向いて、わたしたちが来るまで待ってくれた。

「おはよう、しずるちゃん」

「おはよう、加奈。…と、どこのおこちゃまかな？」

「おれは子供じゃねぇ！」

「君いくつ？　お姉さん今飴もってるんだ。はい、あげるね」

「だーかーらぁ！　子供じゃねぇっつってんだろ！」

「えっ！？　そうなの！？　私よりもこんなに背が低いのに！？」

「いつもそう言ってんだろ！　毎回毎回人を子供呼ばわりしやがって…」

しずるちゃんと雅人くんは会うといつもこんな調子で、しずちゃんはいつも雅人くんを子供扱いしている。

「あははっ！」

「わ、笑うなよ！」

思わず笑ってしまった。雅人くんは抗議するけど、それがまた子供っぽい、としずるちゃんにからかわれる。

そのあとも、一方的に雅人くんをやりこむしずるちゃん。教室の前まで来ると、雅人くんがわたしたちの前に出てこっちを向いて言った。

「秋吉（あきよし）！　今度子供扱いしたらただじゃおかねぇからな！」

「私よりもうんと背の低い紀野（きの）君に、一体何ができるっていうのかしら？」

「うるせぇ！　おまえがでかいだけだろうが！」

「ま、まあまあ二人とも。しずるちゃんは男子と変わらないくらい高いけど、雅人くんだってわたしより高いじゃない」

「うっ……ぜってぇ秋吉の身長抜いてやるからな！」

「どうぞご自由に」

笑顔で応対するしずるちゃん。雅人くんがわたしたちとは別の教室に入っていったあと、わたしたちも自分たちの教室に入って席に着いた。

「ところで加奈、私と会う前に紀野くんと何を話していたの？」

優しくわたしに問いかけるしずちゃん。わたしと雅人くんに会ったときに何かを察していたらしい。話そうか少し迷ったけれど、しずるちゃんには話しておいた方がいいと思った。

それから、わたしが朝しずるちゃんに会うまでに雅人くんと話したことを簡単にしずるちゃんに説明した。

「そうだったの…わかったわ。紀野くんには、私の方から説明しておくわ」

「えっ…？　でも、いいよ…わたしのことだし…自分で言うよ」

「いいのよ。困ってるときはお互い様でしょ？　そのかわり、私が困ったときは助けてね？」

「うんっもちろんっ！　ありがとう、しずるちゃん」

でも、しずるちゃんが困ることなんてあるのかな…？　想像できないや。

昼休み。しずるちゃんは何か用事があるのか、すぐに教室から出ていって、昼休みが終わるほんの少し前に教室に戻ってきた。

放課後。帰る準備をしていると、教室の入り口に立っていた雅人くんに呼ばれた。また今朝と同じことを聞かれるのかな…？不安になって、しずるちゃんの方を見ると、大丈夫だよと言ってわたしに微笑んだ。しずるちゃんに大丈夫と言われると、本当に大丈夫な気がしてくるから不思議だ。しずるちゃんはいつもわたしにいろいろなものを与えてくれる。

「行ってくるね」

しずるちゃんに告げてから、雅人くんのいるところまで行く。

「あ、あのさ…今度の日曜日…なんか予定あるか？」

「え？…別にないけど？」

「な、なら、二人でどっか遊びに行かねえか？　たまの休みくらい、思いっきり遊びたいしさ」

「え？　わたしと？」

「そ、そう、宮下と」

前にも何回かいっしょに遊んだことがあるけど、そのときはしずるちゃんや他にも何人か集まって遊んでいた。だから、二人でなんて誘われて正直驚いた。…昨日のこともあるし、一回パーっと遊んで吹っ切るのもいいかもしれない。それに、せっかく誘ってくれたのに断るのもどうかなと思う。

「うん、いいよ」

「え？　いいのか？　やったぜ！　じゃあ、日曜の朝九時に公園に集合な！」

「うん、わかった。　いつも集合に使ってるあの公園ね」

「そうそう。じゃあ今度な！」

「うん、じゃあね」

用件を済ませると、雅人くんは部活に行ってしまった。教室では、しずるちゃんが待ってくれていた。

「もう用は済んだ？」

「うん。またせてごめんね、しずるちゃん」

「気にしなくていいわ。さあ、帰りましょう」

「うんっ」

家に帰ると、はやく日曜日にならないかなぁ～と、日曜日が待ち遠しくなった。今日はよく眠れそうだ。思った通り、昨日よりも随分と寝つきがよかった。はやく日曜日になぁ～れ。

第2話（後書き）

気づいた方もいらっしゃると思いますが、登場人物の情報を極端に少なくしています。

これは、読み手が自分で設定できるようにわざと書いていません。

それにしても、雅人くんは分かりやすいですね（笑）

第3話

日曜日。空はよく晴れている。天気予報でも、今日は一日中晴れるみたいだ。もっとも、最近の天気予報はあてにならないから、折り畳み傘を持って行くことにする。

待ち合わせの公園に行くと、雅人くんが先に来ていた。

「おはよう、雅人くん」

「よう宮下。…で、なんで秋吉までここにいるんだ！？」

「あら？　私がいっしょじゃ不満なの？」

「いや…そうじゃなくてだな…」

公園に行く途中でしずるちゃんと会った。しずるちゃんもいっしょに遊びたいらしくて、そのままいっしょに二人で公園まで来た。

「お願い雅人くん。しずるちゃんもいっしょに行ってもいい？　三人の方がもっと楽しいと思うの、だから…だめかな？」

「！　…わ、わかったよ。宮下がそこまでいうんなら…混ぜてやってもいいぜ」

「ほんとに！？　よかったねっ！　しずるちゃんっ！」

「ええ。ありがとう、加奈。…そして、チンチクリン」
「…てめぇやっぱつれていかねぇ！」
「つれていってもらわなくても結構よ、勝手について行くから。最初からそのつもりだったし」
「このやろうぉ…！」
「な、なかよくしようよ二人とも～！」

その後、とりあえず行きたいところを考えながら三人で駅に向かった。
「じゃあ、遊園地でいいか？　秋吉が割引券持ってるしな」
「うん、いいよ」
「加奈がいいならいいわ」
遊園地とか小学校以来だよ～。楽しみっ！

それからしばらくして遊園地についたわたしたち。
「うわぁ…人がいっぱいだね」

「そうね。人がゴミのようだわ」
「…よし、入るぞ」
「あら、スルー？　つれないわね。」
「いちいちかまってられるかっ！」
チケットを買って園内に入る。
「どれにする？」
しずるちゃんが地図を広げてわたしに尋ねてくる。
「じゃあまずは…コーヒーカップ！」
「えっ！？　最初にコーヒーカップにのるのか！？」
「嫌なら紀野君は来なくていいわよ。さあ行きましょう加奈」
「お、おいっ！　ちょっと待てよっ！」
コーヒーカップにのった後も、いくつかのアトラクションで遊んだ。
「ちょ、ちょタンマ！　もう無理だ！　休ませてくれ！」

「何よ、男のくせに弱々しいしいわね。それでも運動部なの？」

「う、うるせぇよ！」

雅人くんはフラフラになっていた。少し休んだ方がいいかもしれない。

「わたしはいいよしずるちゃん。それに、もうお昼すぎちゃってるし。わたし、おなかすいちゃった」

「そうね、わかったわ加奈。それじゃあ少し遅いけど、お昼にしましょうか」

「…なんなんだろうな…この扱いの差は」

昼食をとった後、またいろいろなアトラクションで遊んだ。

「そろそろ帰る時間ね」

空を見ると、日が傾きかけていた。明日も学校があるし、そろそろ帰らないといけない。

「それじゃあ、最後に観覧車にのろう？」

わたしの提案で三人で観覧車にのった。観覧車から見る景色は、夕日が遊園地を紅く染めていて、とてもきれいだった。

帰りに、日が暮れているからと言って、雅人くんとしずるちゃんが家まで送ってくれた。

「今日はありがとう。とっても楽しかった！　また、いっしょに行こうねっ！」

「ああ」

「ええ、そうね」

雅人くんもしずるちゃんも笑って答えてくれた。

「じゃあ、また明日な」

「うん」

「おやすみ、加奈」

「おやすみ、しずるちゃん」

お別れのあいさつを済ませると、二人は帰っていった。

今日は本当に楽しかったなぁ…。また行きたいな、遊園地。今日の余韻に浸りながら眠りについたからか、夢の中でも遊園地に行っていた。

第3話（後書き）

省略しすぎたかもしれません（汗）

理由はそのうちわかると思いますけど。

第４話

翌日。

「よう、宮下」

「あっ、おはよう雅人くん」

登校している途中で雅人くんにあった。そのまま二人で学校に向かう。

「昨日はありがとう。すっごく楽しかった！」

「おれも楽しかった！」

「雅人くんってばコーヒーカップにのったあと、もうフラフラだったよね」

「しょ、しょうがねぇだろ！？　秋吉がまわし過ぎなんだよ！　あんだけまわせば誰だってフラフラになるって！」

「あとそれに…」

そのあとも雅人くんをからかいながら歩く。からかったときの雅人くんの反応がおもしろくて、ついまたからかってしまう。しずるちゃんがうつっちゃったかな？

「じゃあ、また今度な」

「うん」

教室の前で別れる。雅人くんが教室に入り、わたしも自分の教室に入ろうとしたとき、ふと、誰かに見られている気がした。あたりを見まわすと、彰くんがわたしを見ていた。部活のときにはしていなかった黒縁(くろぶち)のメガネ越しに目が合うと、すぐに目をそらされた。そのあと、彰くんは雅人くんと同じ教室に入っていった。わたしも自分の教室に入る。さっきのは一体なんだったんだろう？　しばらくして、しずるちゃんが登校してきた。昨日の遊園地での話をしているうちに、今度は何をしたいかという話になった。

「今度はショッピングにでも行きましょう。紀野君は荷物持ちとして特別に参加させてもいいわね」

「そんな、荷物持ちだなんて雅人くんに悪いよ～。ふつうにみんなでショッピングしよう？」

しずるちゃんのあんまりな発言に、ふつうを提案するわたし。

「でもたぶん、紀野君は荷物持ちとしてしか参加できないと言ったとしても、いっしょにくると思うわよ？」

「え？　なんでわざわざ荷物持ちのためにくるの？」

「ふふ…さあ、なんでかしらね？」

うーん…しずるちゃんの言ってることはよくわからない…。きっとわたしの頭が悪いからなんだろうな。くすん。

そのあと、ある授業で教室を移動するときに、また、彰くんがわたしを見ていた。休み時間に教室をでたときや、体育の移動のときも、彰くんはわたしを見ていた。

そんなことが数日続いたある日。しずるちゃんにこのことを話してみた。

「ここ最近、須藤(すどう)君が加奈のことを見てるって？」

「うん、そうなの」

しずるちゃんは少し考えてから、何かを思いついたように言った。

「もしかすると、加奈のことが気になり始めたんじゃない？」

わたしが告白してから気になり始めたってこと？　ふったときには気にならなかったけど、ずっと見ているうちに気になり始めて…　それでそれで、わたしが告白した場所に彰くんから呼び出されて…うふふふ。

「そ、そうなのかなー？」

「そんなに顔赤くしちゃって。まだ須藤君のことが好きなのね」

しずるちゃんは笑いながら茶化してそう言った。

その日の昼休み。

「加奈、彰くんが呼んでるわよ？」

「え？」

しずるちゃんに言われ、教室の入り口を見ると、彰くんがいた。

「ちょっと行ってくるね」

「いってらっしゃい」

しずるちゃんは微笑して言った。彰くんのところまで行く。

「その…宮下さんに話があるんだけど、いいかな？」

「え？　いいけど…話って？」

「ここじゃなんだから、ちょっと移動してもかまわないかな？」

「う、うん」

も、もしかして話って…告白とかかな！？　人目につかない場所まで移動してから、彰くんが話し始めた。

「じ、実はさ僕…き―――のことが好きなんだ」
「えっ？」
い、今、君のことが好きって言った！？
「だ、だからさ、僕…紀野―――のことが好きなんだ」
え？　雅人くんのことが好き？　でも、雅人くんは男の子で、彰くんも男の子で…
「ええーっ！？　彰くん、雅人くんのことが好きだったの！？」
「ち、ちがうちがう！　あと声が大きいよ宮下さんっ！」
彰くんに少し小さめの声で言われ、あわてて口を塞ぐわたし。思わず大声を出してしまった。
「ぼ、僕が好きなのは、紀野の妹さんだよ」
顔を赤くしながらさっきよりも少しはっきりとした口調で言う彰くん。今まではわざとぼやかしてしゃべっていたみたいだ。
「なーんだそっかぁ…未織（みおり）ちゃんのことが好きなのかー…って、ええーっ！？」
「だ、だから声大きいって！」
しまった…またやっちゃった。人目につかない場所とはいえ、

いつだれがここにきてもおかしくない。わたしたちみたいにこっそり話すためにくる人がいるかもしれない。…もうこっそりでもなんでもなくなってしまっているけど。

「…で、どうしてそんな話をわたしに？」

「そのさ…宮下さんって、紀野と仲いいだろ？　だから、ちょっと協力してもらえないかと思って」

「わたしじゃなくても、しずるちゃんに頼めばいいんじゃないの？」

「秋吉さんはその…言ったらからかわれそうだから…」

「あー…なんとなく分かる気がする…」

「…で、協力してもらえるかな…？」

彰くんがわたしを好きだっていうのは勘違いだったみたい。少し残念。協力っていわれても…どうしよう…

「協力って…何をすればいいの？」

「そうだな…今度ある祝日に、紀野と妹さん、ああ未織ちゃんね、と僕と宮下さんの四人で何かするとか？」

何か…あ、そうだ！

「じゃあさ、ショッピングに行こうよ！」

「それはいい提案だね」

「それでさ、しずるちゃんも呼んでいいかな？」
「え？　秋吉さん？　うん、かまわないけど？」
「じゃあ、五人で祝日にショッピングってことでいい？」
「ああそれと、紀野を誘うのも宮下さんにしてもらえないかな？」
「え？　どうして？」
「僕が紀野に、妹さんも呼んでくれ、って言ったら、僕の気持ちが紀野にばれちゃうだろ？　紀野って、雰囲気のわりに未織ちゃんのこと大事にしてるからね。何されるかわからないよ」
「うん…確かにそうだね…わかった。雅人くんもわたしが誘うね」
「ありがとう。よろしくお願いするよ」
「うん」

そのあと、まず雅人くんを誘ってみた。

「え？　今度の祝日に未織もいっしょにショッピングに行かないかって？」
「うんっ」

「い、いいけどよ…なんで未織まで誘う必要があるんだ？」
「そ、それは…お、大勢の方が楽しいからだよっ！」
「あ、ああ…そうか…。じゃあ、未織に伝えとくよ」
「よろしくねっ」

次にしずるちゃんを誘ってみた。
「今度の祝日にショッピングに行こうって？」
「うんっ」

しずるちゃんは少し考えたあと、返事をくれた。
「ええ、いいわよ」
「よかったぁ…ありがとう、しずるちゃん」
「どういたしまして…？」

わたしの物言いにいぶかしむしずるちゃん。しずるちゃんがいれば、困ったときにきっと助けてくれる。でも、なるべく頼らないようにしないと。頼るのは、本当に困ったときだけにしよう。それに、同い年の女の子がいないのは心細いっていうのもあったしね。

次の日。未織ちゃんも参加してくれることが決まり、待ち合わせ場所と時間を決める。午前１１時に集まって、昼食をとったあと、ショッピングをしたり遊んだりするという予定に決まった。

夜。今度の祝日は少しあわただしくなるんだろうなぁ、とみんなとショッピングに行くことに思いを馳せる。彰くんと未織ちゃんをくっつけるにはどうすればいいのかも考えなければいけない。大変だなぁ…。祝日がくるのを、期待と不安が入り混じった気持ちで待ちながら、わたしは眠りについた。

第４話（後書き）

やっと出そろいました。

一回、途中まで書いていたものが消えたときはショックでしたね…。

いよいよ次で最終話になります。

最終話と言っても、まだあったりなかったりするんですけどね。

第5話（完）

祝日。今日はみんなとショッピングに行く。何買おうかな？
それと、彰くんと未織ちゃんのことも考えないと。

「お待たせっ！」

「よう、宮下」

「お姉ちゃんおそーい！」

「こんにちは、宮下さん」

まだ集合時間になっていないのに、もう雅人くんと未織ちゃんと彰くんが来ていた。

「ごめんね未織ちゃん、用意に手間取っちゃって」

笑って未織ちゃんに言う。視線を移すと、雅人くんがわたしを見ているのに気づいた。

「？　わたし何かおかしなところとかある？」

「い、いや！　全然おかしくないぞ！」

大げさな仕草で否定する雅人くん。

「それにしても、秋吉のやつ遅ぇな」
「え？　まだしずるちゃん来てないの？」
「私ならここにいるわよ？」
「「うわっ！？」」
　急にしずるちゃんが出てきてびっくりした。雅人くんもわたしと同時に驚いた。
「ど、どこから出やがった！？」
「何よ、人を化け物みたいに。ずっとそこにいたわ」
　そう言ってわたしたちから死角になっている場所を指さすしずるちゃん。
「…いつからいたんだ？」
「んー…紀野君が未織ちゃんといちゃいちゃしながら来たところから？」
「いちゃいちゃしてねぇよ！　しかも、おもいっきり最初からいたんじゃねぇか！」
「だから言ったじゃない、ずっとそこにいたって」
「何のためにそんな…」

「何のためって…からかうために決まってるじゃない」

さも当然といった顔で答えるしずるちゃん。唖然とする雅人くん。そこまでするかなぁ…とはわたしも思ったけど。

「こんにちは、秋吉さん」

気を取りなおして、しずるちゃんにあいさつする彰くん。

「しずるさん！　こんにちわです！」

そう言ってしずるちゃんにおもいっきり抱きつく未織ちゃん。わたしと同じくらいの背丈の未織ちゃんを、しずるちゃんはちゃんと受けとめる。

「みんなそろったみたいだし、何か食べようか」

彰くんがみんなに食事を勧める。

「そうだな。秋吉なんかに構ってないでさっさと…っておい！　おれをおいてくな！」

建物の入り口から移動して、手頃なファーストフード店に入って食事を済ませ、服などを買うためにお店をまわって行く。

「会った時から思ってたんだけど、秋吉さんが髪留めしてるなんて珍しいね」

「そうそう。それに、その髪留めかわいいね」
「しずるさん、すごく似合ってます！」
彰くんの発言を発端にして、わたしと未織ちゃんが続けて言う。
「そう？　ありがとう」
しずるちゃんは少し照れたように笑った。しずるちゃんが照れ笑いするなんて珍しい。
「ほんとだな…気づかなかった」
雅人くんはたった今気づいたみたいだ。
「そんなだから紀野君はいつまでたっても…」
哀れむように言って、途中で言葉を切るしずるちゃん。
「な、なんだよ！？　言いたい事があるならはっきり言えよ！」
しずるちゃんの物言いに、たじろぐ雅人くん。
「なんでもないわ。気にしないで」
満面の笑みで言うしずるちゃん。納得しかねる顔をしつつも、押し黙る雅人くん。それにしても、しずるちゃんは何が言いたかったのかな？　ちょっと気になった。

「そうだわ。紀野君、ここの店の服着なさい」

あるお店に入ると、何か思いついたのか、雅人くんにこの店の服を着るように勧めるしずるちゃん。

「…おまえはバカか？」

わたしたちが今いる店は、女性用の服だけを売っている店だ。

「え？　どうして？」

「何不思議そうな顔してんだ！　この店の服は女物だろうが！」

「そうよ？」

「わかってるなら、な・ん・で・おれに着せようとするんだ？」

「いいからとりあえず着なさいよ」

「よくねぇよ！」

ひと通りしずるちゃんと雅人くんが話し終えてから、しずるちゃんがわたしの方まで来た。小声で、雅人くんに女物の服を着るように説得してもらえないか、としずるちゃんに頼まれる。なんでそんなに雅人くんに女物の服を着せたいのか分からないけど、しずるちゃんに頼まれたら断るなんてできない。今までたくさんお世話になったし。

「あの…わたし、雅人くんが女の子の格好してるのみてみたいなぁ…なんてっ」

「！　ほ、ほんとにみたいのか？」

「う、うん！」

「…わかった。着てやるよ」

しぶしぶといった感じで承諾してくれた雅人くん。…こ、これでよかったのかなぁ？

「これなんかどうだ？」

「さすがね須藤君。用意がいいわ」

さっそく彰くんがもってきた服を試着する雅人くん。

「お兄ちゃんすっごく似合ってる！　あははっ！」

「紀野。おまえって、そんな隠れた才能があったんだな…」

「雅人くん、かわいいよ！」

「さすがね、紀野君」

みんなは茶化して言っていたけど、わたしは純粋にかわいいと思った。

「な、なんか足がスースーするな…」

雅人くんが今着ているのはワンピースだ。雅人くんは恥ずかしそうにスカートを抑えている。

「じゃあ今から紀野君は、この格好のままお店をまわるわよ」

「は！？」

「すいませーん。これくださーい」

「えっ！？　ちょ待てよおま…」

「これかわいいね」

「こっちもかわいいです！」

「どれにしようかしらね」

結局、雅人くんはそのままの流れでワンピースを着たままでお店をまわっている。今いるお店は、アクセサリーが置いてあるお店だ。雅人くんと彰くんはいっしょにお店の外にいる。もうすでに、メイクするための道具と靴を買いそろえた。あとは、アクセサリーを買って、雅人くんにメイクを施すだけだ。

「これにしましょうか」

三人の意見が一致したものを買って、いよいよ雅人くんをメイクする。

「動かないでよ…」
しずるちゃんとわたしとで交互にメイクを施していく。
「よし出来た！　はい！」
「「お～！」」
彰くんと未織ちゃんが雅人くんの変わりように驚く。
「え？　おれ今どうなってんの？」
みんなで一斉に写メを撮る。
「撮るなぁ！」
もう撮っちゃった。てへっ。
「で、おれ今どうなってるんだ？」
「紀野君にはみせないわ」
「は？　なんでだ？」
「だって、そのほうがおもしろいじゃない」
「…おまえなあ」

そのあとも雅人くんは女の子の格好のまま、みんなで建物内のゲームセンターにいく。遊んでいるとき、わたしたち以外のまわりの人たちの視線が雅人くんに集まっていた。

「そろそろ帰る時間ね」

しずるちゃんがみんなに伝える。

「今日はすっごく楽しかったです！」

「そうだね」

「わたしも！」

「ええ、そうね」

未織ちゃんの感想に、彰くん、わたし、しずるちゃんの順に答える。

「…おれはどう言えばいいんだ？」

「雅人くんは、楽しくなかった…？」

「ま、まあ楽しかったけどよ…」

わたしの質問に、微妙な顔をして答える雅人くん。

「じゃあ、帰りましょうか」

そうしずるちゃんが言って、みんな帰ろうとする。

「ところで紀野、その格好のままで帰るのか？」

「え？…ああ！　す、すぐに着替えてくる！」

彰くんが気づいて雅人くんに伝える。雅人くんは近くの服屋さんにダッシュ。…違和感無くなってて気づかなかった。

「あと少しだったのに…」

「秋吉！　てめぇ覚えてろよ！」

そのあと、雅人くんが着替えてから、みんなで帰った。

家に帰って寝る前に、今日のことを思い出す。今日もいろいろあって楽しかったなぁ…。あっ！　そういえば、彰くんと未織ちゃんとのことすっかり忘れてた…。まあ、楽しそうだったからいいかな？　またみんなで遊びたいなぁ…。そしてわたしは眠りについた。

しずるちゃん、雅人くん、未織ちゃん、彰くん、他のひとたち。みんながいるこんな賑やかな場所が、わたしのいるところなんだと、感じながら――

第5話（完）（後書き）

ここまで読んで下さってありがとうございます。

今後も、何かしらを書き続けていこうと思います。

気が向いたら、後々に書くであろう小説も読んで頂けると幸いです。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2941i/

宮下加奈のいるところ

2010年10月16日10時53分発行